この物語は18歳未満の方が読んではいけません。
そもそも18歳未満は神社モドキ自体を閲覧することをお勧めしません。
この第3話からは有害な記述が目白押しです。
JUNKMAN のポリシーとして特に具体的な警告はいたしませんが、読み進められる場合は自らの責任でそれなりの覚悟をしてお進みください。
なお、無断転載・翻訳の類いはお断り申し上げます。

ノモイの頸木・第3話
by JUNKMAN

＊＊＊＊＊

ネオ・ヨコハマを目前に立ち止まった超巨大美少女型異星人ユキは、飛来してきたヘリコプターとしばし話し込むと、小さく頷いて動きを再開させた。
その後に彼女が取った行動は意外だった。
両手でスカートをたくし上げ、足下の地球人たちに自分のパンツを見せびらかし始めたのだ。

**「皆さん、この眺めはいかがですか？気にいっていただけましたか？」**

真下を向いて意味ありげにニヤリと笑う。

**「・・・もし気に入っていただけたなら、もっと凄いことやっちゃってもいいですけど・・・」**

＊＊＊＊＊

「・・・ユキさん、あなたの戦略には致命的な欠陥がある。」

**「？」**

「『正当防衛』の名の下に蹂躙を続けることはできても、でもこのままでは地球の所有権の獲得に至る法的根拠は得られませんよね？」

**「！」**

「力づくで奪ってしまえば銀河星系間協定違反の『侵略行為』になり、あなたは異星における違法行為取締規約に則って来星するスンゲデッカ星警察に検挙されてしまいます。それはマズいでしょ？」

**「そ、そうだけど・・・」**

「だからあなたは地球を所有することはできない。すなわち、地球の政府が降伏せずに抵抗する道を選んだら、あなたは永遠に侵略の最終目標を達成することはできないのです。」

**「じゃ、じゃあ、どうすれば良いというの？」**

「簡単です。正式に譲渡の契約を結べば良いのですよ。」

**「え？」**

「この譲渡に当たっても、恫喝行為があってはいけません。先ほど地球人に恐怖感を抱かせる行為がありましたが、あれが過ぎると下手すれば正当な譲渡の契約とは認められなくなる恐れがあります。注意しましょうね。あくまでも穏便に、譲渡する側が『任意』であなたに譲渡する形に持ち込まなければなりません。」

**「そんなこと、できるの？」**

「できます。そのために、この私があなたに協力しようと申し出たのです。」

チャン広報官は自信たっぷりに頷いた。
ユキは半信半疑である

**「どういうこと？」**

「わたし、エリック・チャンは、あなたに地球の所有権を譲渡する権利を有する人物の性癖を知り抜いています。この地球の最高権力者、地球連邦政府事務総長という男の性癖を。」

＊＊＊＊＊

超巨大美少女型異星人ユキの突然の暴走は止まらない。
次はいきなりソックスとシューズを脱ぎ捨てナマ脚状態になると、シャツをまくり上げてもろ乳解放、さらにはあろうことかパンツまで脱ぎ捨ててみせたのである。
このナマ脚・はみ乳・ミニスカノーパン、という状態の超巨大美少女型異星人ユキは、足下から見上

げるネオ・ヨコハマの市民たちにはまんこ丸見えという状態であることを気にも留めず、超高層ビル街を悠々と跨いで艶めかしいポーズを取った。

**「皆さん、安心してください。ボクはこの星を侵略するつもりなんて、全くありませんからね！皆さんの方からボクを攻撃してこない限り、ボクが皆さんに乱暴な行動を取ることはありません！侵略なんか、絶対に、絶対に、しませんからね！」**

ユキは地球人たちの視線を意識して、むき出しのヒップを突き出してみせる。まるで非現実的な光景を見せつけられて呆然とする市民たちに向かって、ユキはぼそりと呟いた。

**「でも皆さんの方から『地球をあげます』と言い出してきたなら、もらってあげてもいいかな・・・」**

＊＊＊＊＊

「な、なんじゃ、いったいこれはどうしたんじゃ？」

事務総長は事務総長執務室のモニター越しにユキの痴態を見つめて目玉がまん丸になっていた。
ネオ・ヨコハマの超高層ビル街を遙かに跨ぎ越す超巨大女子高生が、半裸になって、胸を突き出したり、ヒップを突き出したりと、至れり尽くせり、もとい、やりたい放題である。

「い、いかん、ティッシュ、ティッシュ・・・」

慌てふためいた事務総長がティッシュボックスを探すために視線を切ると、モニターの中から超巨大美少女型異星人が鼻にかかった声で話しかけてきた。

**「・・・事務総長さああん、視てますかあ？」**

「！」

モニターに向き直ると、超巨大美少女型異星人は事務総長を見つめながら、艶っぽくにやりと笑った

**「事務総長さーん、どうですか？、ボクのこのエッチな姿？もっとエチエチな方が良いですか？・・・そうねえ、もっとすんごい格好を見せてあげても、良いですけど・・・」**

＊＊＊＊＊

「良いですよ、良い感じで追い込んでますよ！」

ユキの顔のあたりをぱたぱたと飛んでいるヘリコプターの中から、チャン広報官は声をかけた。
ユキの方は今ひとつ浮かない顔である。

**「ホントにこんなことして地球を譲渡してもらえるの？」**

「少なくとも、方向性としてはこれで間違いありません。」

チャン広報官は自信たっぷりだ。

「あの事務総長という男は、時間があれば執務室に籠もって R18 動画とか鑑賞しているエロ爺です。ユキさんのエロい誘惑に勝てるはずがありません。」

**「ホントに？」**

「ええ。ですが、まだこれでは足りない。全然足りません。もっともっとエロさ全開で攻めましょう！」

＊＊＊＊＊

ユキは今度はスカートを脱ぎ捨てた。
それまでもこのスカートが機能していたかどうかは大いに疑問であるが、これでもう下半身は名実ともに思いっきりすっぽんぽんである。

その格好でネオ・ヨコハマの上空に覆い被さるように四つん這いになる。
市民の見上げる上空には、超巨大女子高生のむき出しナマ乳が、双子山よろしく二つ並んでどかーんと大迫力で逆さにぶら下がっていた。

**「・・・ねえねえキミたち、ボクのおっぱいはどう？でっかいでしょ？キミたちから見たら、ホントに山だよね？くくく、登ってみたい？」**

今度は視線を変えて向き直る。
この状況の実況中継を見守っているはずの事務総長に向けて、直接の訴えかけだ。

**「事務総長さん、どうですか、ボクのエッチなおっぱいは？もっと見たいですか？直接登ってみたいですか？うーん、どうしようかなあ・・・もし、事務総長さんがボクに『地球をあげます』って言ってくれるなら・・・考えてみないこともないですけどねえ・・・」**

＊＊＊＊＊

「う、うおおおおおおおおおお！！！」

事務総長はモニターいっぱいに映るユキの巨大なナマ乳・ナマ尻を見て、目を血走らせていた。

「こ、この娘に『地球をあげます』と約束したら、こ、こ、これ以上のことを見せてもらえるのかね？」

「そのようです。しかも見せてもらえるだけじゃなく、あの乳房山に登山までさせてくれるそうじゃないですか。」

執務室のスタッフが事務的に返答する。

「乳房山に登山！！！・・・素晴らしい！！！それは男のロマンではないかね！！！では早速彼女に地球を譲・・・」

「事務総長！」

「ととと、そんなわけにはいかんぞ。これしきのことで地球を渡してたまるものか！」

＊＊＊＊＊

「・・・効いてる効いてる、良いですよ、事務総長はいま歯を食いしばって耐えている状態です。」

チャン広報官はタブレット端末を操作しながらユキに報告した。
ユキも満足そうである。

**「ふんふん、じゃあ、もう一押ししてみたら・・・」**

「行けるんじゃないですか？」

＊＊＊＊＊

ずうううううううううううううううん
ユキはいきなりネオ・ヨコハマの高層ビル街の真ん前に座り込むと、ふんぞり返ってビルを跨ぎながら両脚を大きく広げてみせた。
言わずもがなの大開帳である。

**「じゃーん、それでは大サービス、なんとなんと貴重な現役JKの公開おっぴろげでーす！ほうら、まんこくっぱーだよ❤でっかいでしょ？くくく、キミたちのマイクロちんぽなら何万本くらい入るかなあ？・・・え？一番肝心なところがビルに隠れてよく見えない？あらあら、それは残念ですね・・・でもね」**

そこでまたユキは視点を変える。

**「・・・もしも事務総長さんがボクに『地球をあげます』って約束してくれたら、もっとよーく見せてあげるんだけどなあ・・・」**

＊＊＊＊＊

事務総長執務室ではスタッフたちが猛り狂う事務総長をよってたかって羽交い締めにしていた。

「こりゃ、放せっ！放さんかっ！」

「事務総長！落ち着いて！」

「馬鹿者っ！これが落ち着いていられるものか！超巨大女子高生がパンツ脱ぎ捨て大股開いてまんこ大開帳なんじゃぞ！　」

「事務総長、公的な立場にあるお方が、さすがに放送禁止用語を声高に口にするのは・・・」

「ええい、それだったら陰部でも女性器でも何でもいいわい！ともかくそれがもっと大胆に見せてもらえるなら、この地球くらい・・・」

「え？」

「あ・・・いやいや、ワシとしたことが、軽はずみな言動をするところじゃった。いかんいかん、こんなことであの娘に『地球をあげます』なんて、言ったらたいへんなことじゃな。」

「そうですよ。」

スタッフたちはようやく事務総長を羽交い締めから解放した。

「ふう、安心しました。一時はどうなることかと・・・」

「ふん、ワシを見くびるな。この程度で地球をあげてしまったらもったいないじゃろうが。こりゃ、生意気な小娘異星人め、ワシを籠絡したいのじゃったら、次はもっとすっごくえげつなくえっちい絵面を見せてみろ！」

「え？」

狼狽するスタッフたちを後目に、事務総長は意気揚々と通信装置のスイッチを切った。
スタッフたちは肩を落とす。

「あああ、結局このエロ爺は、単にもっとあの巨大異星人のエッチな姿が見たかっただけなんだな。」

「せめてこの大事なときに、防衛軍長官がいてくれたら・・・」

小声で話したつもりだったのに、耳ざとく事務総長が聞きつけた。

「防衛軍長官なら、いまは現場に出動しておるぞ。」

「あ、はあ、そうですか・・・あれ？」

そのとき、初めてスタッフは事務総長の変化に気がついた。

「・・・事務総長、どうなさいました？」

「ん？」

「い、いや、ついさっきまであれほど取り乱しておられたのに、今はまるで冷静な表情で・・・」

「ふん、通信装置のスイッチを切ったからな。相手に見えなきゃ小芝居をうつ必要もないじゃろ？」

事務総長は平然と嘯く。

「・・・それともナニかね、キミたちは、あの程度でこのワシが本当に動揺するとでも、思ったのかね？」

＊＊＊＊＊

「あああ、惜しい！もう一歩で事務総長を落とすことができたのに・・・」

チャン広報官は事務総長執務室でのやりとりをスクリーンに投影してユキに説明しながら地団駄踏んで悔しがった。

「もう一歩、もう一歩なんですけどね。もはや事務総長は立っているのもやっとのフラフラ状態をゴングに救われたKO寸前のボクサーみたいなものです。」

**「じゃあ、あと一発でもパンチがあたればKOってこと？」**

「間違いありません。」

**「その有効打のプランは？」**

待ってましたとばかりに、チャン広報官は東の方向を指さした。

「今です。今こそネオ・トキオ・メトロポリスに移動しましょう。」

**「そこで何をするの？」**

「ネオ・トキオ・メトロポリスの中心部には、この惑星でも最大級のランドマークであるネオ・トキオ・セントラルビルがあります。」

**「それで？」**

「この惑星で最大級のランドマークといっても、ユキさんにしてみたら膝元にも届きません。そいつを

犯してやれば良いんですよ。すごい絵面になりますよ。これなら事務総長もいちころだ。」

**「あはははは、確かに、それは面白いアイディアね・・・」**

ユキは軽やかに笑うと、ヘリコプターのチャン広報官に冷たい視線を向けた。

**「・・・エリック・チャンくん、だったっけ？」**

「？」

**「お芝居はもうそのくらいでいいわ。」**

「！」

**「わかってたわよ・・・キミ、地球連邦政府を裏切ったふりして、実はボクを騙そうとしてるんでしょ？」**

＊＊＊＊＊

話は少し遡る。

「長官、彼らを呼び寄せました。もう既に現地に集結しています。」

「よし、さすがの手際だな。それではわたしも早速現地に向かおう。」

身支度を整えながら、防衛軍長官は背中越しに訊ねた。

「・・・無謀なギャンブルに身を投じるのは君の信条と相容れないんじゃなかったのかね？」

「それが無謀なギャンブルならば、確かに長官のおっしゃる通りです。しかし・・・」

エリック・チャン広報官はタブレット端末に示された数式を防衛軍長官に突き付ける。

「・・・長官の立案した戦略ならば、成功の確率は 17.24%にまで跳ね上がります。未だ期待値として決して高くはありませんが、もはや無謀なギャンブルともいえません。賭けてみても面白いかな、と、思いました。」

チャン広報官は悪戯っぽくウインクしてみせる。

「・・・どうせ賭けるなら、とことん命を張った方が、楽しいでしょ？」

「ふふふ、キミは面白い男だな。」

「お褒めの言葉と受け取らせていただきます。それでは、わたしも彼女相手にひと芝居打ってまいります。」

「うむ、幸運を祈る。」

「長官こそ。」

二人は正対して、互いに敬礼した。

＊＊＊＊＊

**「・・・キミ、ボクに大衆の面前で破廉恥な行為をさせて、それを公然わいせつ罪か何かでスンゲデッカ星に通報して、ボクの身柄を拘束させようと画策したんでしょ？」**

「！！！」

**「残念でした。わいせつは時代や社会によって変わってく流動的な概念なのよ。だから全宇宙に共通の定義はないの。いくらキミたちが『わいせつだ』と騒いでも、ボクが『そんな認識はなかった』と答えれば物別れ。よくある異文化間のギャップというやつだわ。そしてそもそもスンゲデッカ星は表現の自由がとても尊重されているので、公衆の面前で裸になっても『裸になって何が悪い？』と開き直れば全然問題なし。お巡りさんなんか来るわけないわ。キミたち地球の警察が問題視してボクを拘束しようとするのは勝手だけど・・・できるかしらね？くくく」**

「く、くそ、そうだったのか・・・」

悔しがるチャン広報官を嘲笑いながら、ユキは言葉を続けた。

**「そもそもね、ボクはキミたち地球人からこの星を譲渡してもらう必要なんかないんだよ。」**

「？」

**「ボクは正当防衛でキミたち地球人を殲滅する。そうしたらこの地球には所有者がいなくなるよね？そこで所有者不在の拾得物としてスンゲデッカ星警察に届けておけば、半年後には合法的にこの星の所有権はボクのものになる、ってこと。どう？完璧でしょ？」**

「！」

**「ま、キミもその小さな脳味噌で精一杯考えたんでしょうね。ぷふふ、残念でした。」**

チャン広報官はがっくりと肩を落とした。
計略は全て水の泡だ。
勝ち誇ったユキは饒舌である。

**「・・・でもね、そんなどチビの分際で、ボクを騙そうとしたことは、ちょっとムカつくかな。」**

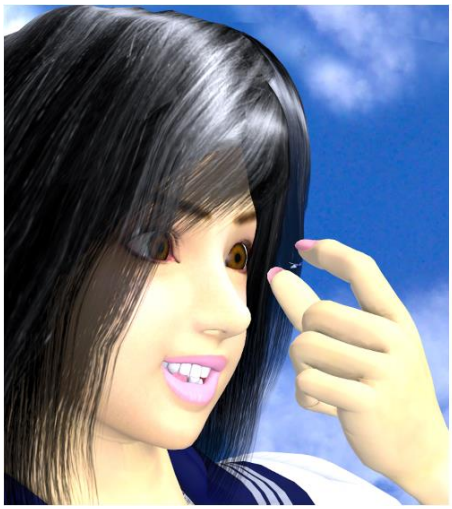
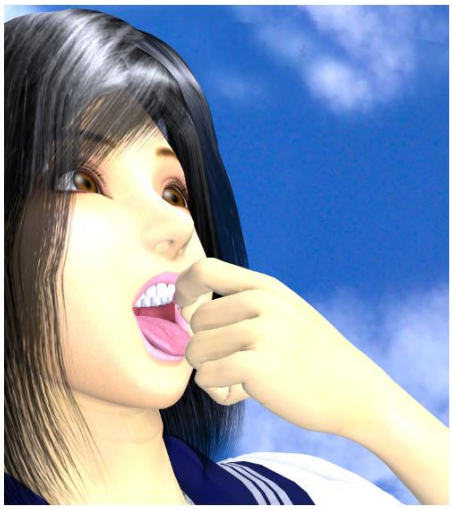
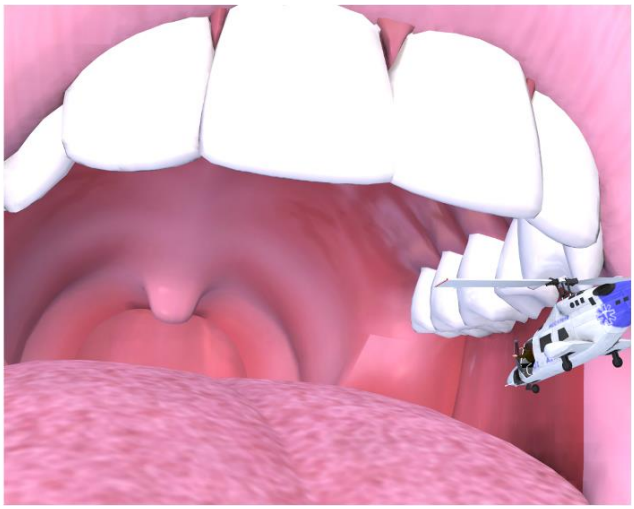
ユキは急に真顔になると、自分の鼻先を飛んでいるチャン広報官のヘリコプターに向かって超巨大な指を伸ばした。

「わ、うわあああああああああ！！！」

チャン広報官のヘリコプターは、いきなり制御を失った。
尾部をユキの超巨大な二本の指で挟みこまれた、すなわち、指二本で摘ままれてしまったのだ。
ユキはその哀れなヘリコプターに侮蔑の視線を送ると、勝ち誇ってあんぐりと口を開いた。

**「こんな小さなヘリコプターなんか、一口だよ。あーん」**

「うわあああああああああああ！！！」

呑みこまれる！
ユキの口腔はジャンボジェット機だって数十機まとめて放り込める巨大さだ。
こんな小さなヘリコプターなんか一呑みだ。
のどにかすりもしないだろう。
実際にさっきは罪もないネオ・ナゴヤ市民を何人も丸呑みにしている。
もうダメだ。
チャン広報官は頭を抱えて両目を閉じた。

**「あはははははははは！」**

ヘリコプターは口腔に放り込まれなかった。
その代わり、指先で虚空に弾き出されて天地がくるくるとひっくり返った。

**「ふん、どう？怖かった？くくく、自分の弱さを思い知ったでしょ？でもね、ボクはキミを最後まで殺さないよ。ボクを騙そうとした罰だよ。キミは最後まで生きて、一人っきりで見届けるんだよ。無力な地球人が、為す術もなく滅ぼされていく惨めな姿をね。あはははははははは！」**

ユキは上機嫌に笑い飛ばした。
チャン広報官は放り出されたヘリコプターの機体を制御するのがやっとで、ユキの挑発に応えることもできない。

**「というわけでキミはボクを計略にかけることができなかったわけだけど、でも、そのネオ・トキオ・メトロポリスのランドマークを犯すってのは、悪くないアイディアだね。キミに言われなくても、やってみたいかな。あはははははははは！」**

ユキは高笑いしながら立ち上がった。

**「エッチなところ、見たかったんでしょ？そうね、ボクも見せつけたかったから、珍しく利害は一致したね。あはははははははは！」**

そう言い捨てると、ユキは東へ向けて地響きを立てて歩き始めた。
ずっしいいいいん
ずっしいいいいん

向かう先はネオ・トキオ・メトロポリス。
その中心に君臨するネオ・トキオ・セントラルビルである。
もはや地球人には何の希望もない。
・・・
・・・
・・・
と、思いきや、ようやくヘリコプターの機体制御に成功したエリック・チャン広報官は、ユキの巨大な後ろ姿をしっかりと見据えながら、通信機のスイッチを入れた。

「・・・長官、エリックです。」

「どうだ？」

「危ない橋を渡りましたが、いま、ターゲットは網にかかりました。」

＊＊＊＊＊

ノモイの頸木・つづく

次回予告
企みは見破られた。勝ち誇る巨大異星人ユキ。地球は、もはや為す術もなく彼女の前に屈するしかないのか？そこで地球防衛軍長官が繰り出す最後の秘策とは？そして絶体絶命の危機に現れた地球の救世主とは？いよいよクライマックス、ノモイの頸木・第４話（最終話）、乞うご期待